

瓢 鮎 抄 (二〇九)

尾池和夫

鏡餅より上座なり菊花石
初めての神社探して初詣
間違へず配り終へたりお年玉
竹とんぼ上手く仕上がり二日かな
初買のまづお揚げさんお葱さん
書初や骨といふ字を歩かせて
お銚子を下戸に気兼ねの三日かな
冬空へ供物をさらふ烏ゐるて

今年こそとわざわざ声にして四日
鯨見の一日の果て温め酒
青空を見上げてゐたりはや五日
小道具の竜の頭や初芝居
羽子板や曾我の五郎のむきみ隈
屠蘇気分まだまだだといふ六日
すき焼や客の流儀を聞きもして
ずつしりと大地踏みしめ寒立馬
大地震目覚めむとする枯野なり
冬雲の切れて太陽スペクトル